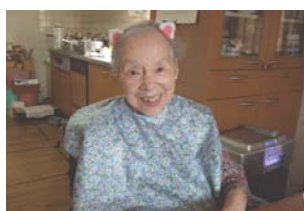


ics²



4th

Inuyama Comparative Social Cognition Symposium
19th - 20th December, 2008 @ PRI Large conference room

第4回 犬山比較社会認知シンポジウム

2008年12月19-20日 @ 霊長類研究所大会議室

プログラム・要旨集



これまで、京都大学霊長類研究所共同利用計画研究「チンパンジーの発達に関する総合的研究」などの成果公表とも連携する形で、3年にわたって社会認知機能力の比較研究の可能性を探る研究会を開催してきました。これまで『視線、共同注意、心の理論（2005年）』、『自己と他者を理解する—比較認知発達のアプローチ—（2006年）』、『メタX—社会的認知における階層的処理過程の比較認知発達—（2007年）』と、社会認知の幅広い領域のテーマとして取り上げ、活発な議論を行ってきました。これまでの研究会は参加者間の研究交流を促進し、「比較社会認知研究」を展開していく上でも、ユニークな場を形成しつつあります。若手研究者から海外の研究者まで幅広い参加者が幅広い視点で幅広いトピックについて自由に議論する場として、この研究会をこれからも育てていければと考えています。4回目の今回はこれまでとりあえずの総括ということで特に大きなテーマは設けず、比較社会認知研究であれば（でなくとも）何でもOKという形にしました。このようなミックスアップの中から刺激的な研究が生み出されることを期待します。

第4回犬山比較社会認知シンポジウム(4th iCS2)世話人

友永雅己、林 美里、松沢哲郎(京都大学霊長類研究所)、田中正之(京都大学野生動物研究センター)、板倉昭二(京都大学文学研究科)

プログラム

12/19 (金)

12:00- 受付開始

セッション1 座長: 友永雅己

- 13:00-13:10 友永雅己 オープニング
- 13:10-13:40 木村美奈子(愛知県大)『幼児の映像理解の発達—“テレビ”
という不思議な箱をめぐる—』
- 13:40-14:10 大神田麻子(学振、京都大・文)・板倉昭二(京都大・文)『就学前
児はどのような質問に肯定バイアスを示すのか?』
- 14:10-14:40 直井望・皆川泰代・山本淳一・小嶋祥三(慶應大・文、JST/CREST)
『対乳児音声に関与する脳反応の検討』
- 14:40-16:10 休憩 & ポスターセッション

セッション2 座長: 足立幾磨

- 16:10-16:40 大塚由美子(東京女子医大、学振)・本吉勇(NTT コミュニケーショ
ン科学)・小林恵(中央大)・金沢創(日本女子大)・山口真美(中央
大、科学技術振興機構)『乳児の顔認知に対する画像コントラス
ト極性の効果』
- 16:40-17:10 宮腰誠・松尾香弥子・中井敏晴(長寿研)『高齢個体の脳機能と社
会性』
- 17:10-17:40 明地洋典(東京大・総合文化)・千住淳(ロンドン大)・菊池由葵子(東
京大・総合文化)・東條吉邦(茨城大)・長内博雄(武蔵野東教育
センター)・長谷川寿一(東京大・総合文化)『自閉症児における
表情認知時の視線方向の影響 —反応時間、ERP を指標として
—』
- 17:40-18:10 高岡祥子・藤田和生(京都大・文)『イヌにおけるヒトの指差しの
利用』

19:00- 懇親会@多目的ホール (レストラン)

12/20 (土)

セッション3 座長: 明和政子

- 9:00-9:30 ジョン・ヒョンジョン(東北大・加齢医研)『外国語学習: 社会認
知神経科学的観点から』
- 9:30-10:00 瀬野由衣(名古屋大・教育発達科学)『幼児における心の表象性理

- 解の発達 -3歳児の特徴に着目して-
- 10:00-10:30 菊池由葵子(東京大・総合文化)・千住淳(ロンドン大)・明地洋典(東京大・総合文化)・東條吉邦(茨城大)・長内博雄(武蔵野東教育センター)・長谷川寿一(東京大・総合文化)『自閉症児・定型発達児における顔・モノからの注意の解放』
- 10:30-11:00 菊池哲平(熊本大・教育)『自閉症児(者)における表情理解—対人関係性の視点から』
- セッション4 座長: 伊村知子
- 11:00-11:30 蓬田幸人(東北大・加齢医研)『現実認知の神経基盤～多様式感覚にまたがる予測と感覚入力の整合性判断に関わる脳神経ネットワーク』
- 11:30-12:00 山田祐樹(九州大、学振)『時空間表象の形成における情動的・社会的情報の役割』
- 12:00-12:30 佐藤弥(京都大・霊長研)『表情の優先的知覚』
- 12:30-13:45 昼食 & ポスターセッション
- セッション5 座長: 林美里
- 13:45-14:15 永澤美保(麻布大・獣医)『ヒトと犬との交流においてイヌからの注視が飼い主の尿中オキシトシンを上昇させる』
- 14:15-14:45 松田剛(東京大・情報)『チンパンジーの情動画像に対する事象関連電位』
- 14:45-15:15 高橋英之・岡田浩之・大森隆司・神尾陽子(玉川大・脳科学研、神経研)『コミュニケーションで生じるストレスを抑制するための二つの認知的基盤の仮説-自閉症、ロボット、マルチエージェントによるアプローチ-』
- 15:15-15:30 休憩
- セッション6 座長: 友永雅己
- 15:30-16:00 澤田玲子(京都大・霊長研)・土居裕和(長崎大・医歯薬総合研)・正高信男(京都大・霊長研)『手書き文字観察時における自己情報の処理-事象関連電位計測による検討』
- 16:00-16:30 友永雅己(京都大・霊長研)・伊村知子(学振、京都大・霊長研)『チンパンジーの視覚認知における社会的刺激の影響—視線の影響』

	を中心にー』	
16:30-17:00	田村亮 (埼玉学園大・人間) 『「正直なシグナル」としての「微笑み」』	
17:00-17:10	友永雅己	クロージング

ポスターセッション

(50 音順)

- ◎ ポスターは来所したらすぐに所定の場所に貼りつけてください。
- ◎ ポスターセッションの時間を設けますが、在席責任時間は設けません。自由に議論してください。
- ◎ ポスターのサイズは縦 150cm 以内、横 90cm 程度にしてください。

- 1) 足立 幾磨 (京都大) ・ Robert R Hampton (Yerkes National Primate Research Center)
Cross-modal representations of familiar conspecifics in rhesus monkeys
- 2) 石田 裕昭・村田 哲 (近畿大)
サル頭頂葉の視覚-触覚多種感覚ニューロンによる自己と他者身体の共有マッピング
- 3) 伊村 知子・友永 雅己 (京都大) ・ Albert Yonas (Univ of Minnesota)
チンパンジーにおける奥行きの錯視—エイムズの窓を用いて
- 4) 魚野 翔太・佐藤 弥・十一 元三 (京都大)
「広汎性発達障害における動的表情の処理」
- 5) 大隅 尚広・大平 英樹 (名古屋大)
最後通牒ゲームにおける **Dual-Process** の検討—時間の影響とサイコパシー傾向の関連
- 6) 大貫 泰・高橋 英之・岡田 浩之 (玉川大)
期待との不一致による表情知覚の変化
- 7) 兼子 峰明・友永 雅己 (京都大)
チンパンジーにおけるエージェンシー認識 —トラックボールを用いたカーソル弁別課題による検討
- 8) 狩野 文浩 (京都大)
チンパンジーは食べやすいものから食べる？
- 9) 上條 中庸、塚田 実、相原 威 (玉川大)
海馬の可塑性ニューロンにおける情報統合
- 10) 清河 幸子 (中部大) ・ 植田 一博 (東京大)
洞察問題解決において他者の試行を観察することがもたらす効果の検討
- 11) 後藤 和宏 (慶応大) ・ 藤田 和生 (京都大) ・ 渡辺 茂 (慶応大)
フサオマキザルとハトにおけるパターン優位性効果の検討
- 12) 田中 正之 (京都大) ・ 釜鳴 宏枝・山下 直樹 (京都市動物園)
マンドリル乳児における観察学習

- 13) 宮崎 美智子・開 一夫 (東京大)
「身体図式に基づく幼児の自己映像認知」
- 14) 服部 裕子・友永 雅己・藤田 和生 (京都大)
チンパンジーにおける要求の身振りと注意の認識
- 15) 福島 宏器・梅田 聡 (慶応大)
他者理解と自己身体内部受容感覚：心拍誘発脳電位を用いた検討
- 16) 瀧野 裕 (理研)
High cognitive function of an ALS patient in the totally locked-in state
- 17) 松中 玲子・開 一夫 (東京大)
7ヶ月児における視線の利用 - Specificity?Generalize?
- 18) 間野 陽子・杉浦 元亮・月浦 崇・蓬田 幸人・関口 敦・秋月 祐子、鄭 嬌・川島 隆太 (東北大)
他者と共有するエピソード記憶想起に関連する神経基盤：fMRI 研究 (進捗報告)
- 19) 山本 真也・Tatyana Humle・田中 正之 (京都大)
チンパンジーにおける要求に応じた利他的道具渡し行動：他者の要求についての理解
- 20) 横山 絢美・大森 隆司 (玉川大)
他者意図の推定に基づく行動決定過程のモデル化とメタ戦略
- 21) Vera Ludwig (京都大)・Julia Simner (Univ of Edinburgh)
Cross-modal correspondences between touch and vision in humans
- 22) 渡辺 創太 (京都大)
ニホンザル乳児における大きさ判断に及ぼす相対情報と絶対情報の影響 - 自然顔刺激を用いて

発表要旨

木村美奈子 (愛知県大)

『幼児の映像理解の発達— “テレビ” という不思議な箱をめぐる—』

私たちはいつから、テレビの映像を単なる情報として受け取れるようになったのか。テレビ映像のお姉さんの挨拶に、挨拶し返す子どもを見ると、幼い子どもは大人のように映像を見ていないようである。本研究では、幼児期の子どもが目前にしている映像世界をどのように捉えているかを、これまで行ってきた実験的研究から得られたデータを基に考察し、映像世界が単なる表象世界であると理解できるようになるまでのプロセスをたどる。また、著者が提案している発達モデルをもとに、これからの研究可能性について考えたい。

大神田麻子 (学振、京都大・文)・板倉昭二 (京都大)

『就学前児はどのような質問に肯定バイアスを示すのか?』

肯定バイアスとは「はい/いいえ」質問 (以下、YN 質問) に「はい」と答えることが多い現象のことで、発達心理学の実験場面において就学前児に見られることが多い。本研究では、3歳～5歳児がさまざまな YN 質問に肯定バイアスを示すか調べた。3歳児は、物に関する知識質問、物に関する好き嫌い質問、表情に関する知識質問すべてに一貫して肯定バイアスを示した。4歳児は、物に関する知識質問にのみ肯定バイアスを示す傾向にあった。5歳児は強い反応バイアスを示さなかったが、6歳児は表情に関する知識質問に「いいえ」と答える否定バイアスを示した。また、3歳児が YN 質問の回答を知っているかどうかを調べるため、YN 質問で用いた質問の対象物を2つ提示し、正しい回答を選ぶ選択質問を行った。その結果、3歳児は実際には回答を知っているにも関わらず、YN 質問には肯定バイアスを示すことが分かった。肯定バイアスのメカニズムについて議論する。

直井望・皆川泰代・山本淳一・小嶋祥三（慶應大・文、JST/CREST）

『対乳児音声に関与する脳反応の検討』

大人から乳幼児に向かって話される場合に特徴的な音声である対乳児音声は、ピッチが高い、ピッチの変動幅が大きく、休止が長い、などの特徴をもつ。行動実験の結果から、乳幼児は、大人に向かって話す場合（対成人音声）よりも、対乳児音声に対して選好を示すことが報告されている。本研究では、生後4-13ヶ月齢の乳幼児を対象として、同じ文章を子どもに向けて読んだ対乳児音声刺激と大人向けに読んだ対成人音声刺激に対する脳活動を、近赤外分光法(NIRS)を用いて検討した。また、話し手が自分の母親と未知の母親である条件の比較を行った。その結果、側頭部計測においては、話し手の親近性に関わらず、対乳児音声において、対成人音声よりも有意に高い酸化ヘモグロビンの上昇が見られた。一方、前頭部計測においては、話し手の親近性の効果が見られ、自分の母親の対乳児音声に対してのみ、前頭中央部で有意な酸化ヘモグロビンの上昇が見られた。

大塚由美子（東京女子医大、学振）・本吉勇（NTTコミュニケーション科学）・小林恵（中央大）・金沢創（日本女子大）・山口真美（中央大、科学技術振興機構）

『乳児の顔認知に対する画像コントラスト極性の効果』

ヒトの肌・頭髮・黒目の色や明るさは多様であるが、白目の色は普遍的に黒目よりも明るい無着色（白）である。よって、ヒトの顔は2つの目が鼻と口の上にあるという共通した配置関係を持つのみでなく、白目と黒目のコントラスト極性の関係についても共通している。そこで本研究では、ヒトの顔に共通した白目・黒目のコントラスト極性が乳児の顔処理に重要な役割を果たす可能性を検討した。実験ではオリジナルの顔画像・顔全体のコントラストが反転した画像・眼球領域のみのコントラストが反転した画像・眼球領域以外の顔表面のコントラストが反転した画像を用いて、各画像条件での乳児の顔弁別成績を比較した。実験の結果、乳児は顔表面のコントラスト極性に関わらず、眼球領域のコントラスト極性が保持された条件で顔を弁別することが示された。本研究の結果から目の領域のコントラスト極性は、乳児の顔弁別成績を決定する重要な要因であることが示唆される。

宮腰誠・松尾香弥子・中井敏晴（長寿研）

『高齢個体の脳機能と社会性』

身体機能の低下は生存競争に不利に働く。加齢はそのような身体機能の低下を不可避に生じさせる現象である。一方、ヒトを含む霊長類社会における高齢個体は、経験が社会的能力として評価され、その結果特別な社会的地位を保つものもいる。脳機能イメージングによって社会的認知能力に関係する神経ネットワークの解明が進められてきたが、それは加齢によりどのような影響を受けるだろうか。本発表では、まず加齢による脳機能の変化を示し、次にそれが社会的認知能力に与える影響の可能性について考察する。

明地洋典(東京大・総合文化)・千住淳(ロンドン大)・菊池由葵子(東京大・総合文化)・東條吉邦(茨城大)・長内博雄(武蔵野東教育センター)・長谷川寿一(東京大・総合文化)

『自閉症児における表情認知時の視線方向の影響 –反応時間、ERPを指標として–』

自閉症は他者の表情や視線を社会的コミュニケーション上使用することに困難を示す発達障害である。これまで数多くの研究が、表情や視線を刺激として用いて心理実験を行ってきたが、実のところ、結果は一貫していない。一方、近年の研究により、怒り顔はその視線が正面向きの方が、逆に恐れ顔はよそ向きの方が判断が速くなされるという、表情と視線方向の相互作用が存在することが明らかになった。今回は、自閉症児と定型発達児が、表情判断課題時に、そのような表情と視線方向の相互作用を示すかどうかを検討した研究について発表する。

高岡祥子・藤田和生(京都大)

『イヌにおけるヒトの指差しの利用』

イヌは物体選択課題において、指差しといったヒトの社会的な行動を用いて正解を選択することが多くの研究によって示されている。本研究では、物体選択課題において、社会的な手がかりとしての指差しと、物理的な手がかりとしての報酬を事前に見ることの2つが矛

盾している時のイヌの行動を観察した。またその直後に、社会的な手がかりのみを呈示した場合に、イヌがその手がかりを利用して正解を選択するのかどうかを観察した。結果は、社会的手がかりと物理的手がかりが矛盾した試行を経験した後では、イヌは社会的手がかりを用いた選択をする傾向が低くなった。本研究の結果を踏まえ、今後の研究の展望についても述べる。

ジョンヒョンジョン (東北大・加齢医研)

『外国語学習：社会認知神経科学的観点から』

本発表では、伝統的な翻訳中心の外国語学習方法とコミュニケーション的な外国語学習方法を、社会脳科学的観点から検証した実験結果を報告する。実験では、日本語母語話者に、韓国語語彙とその日本語訳とを提示し学習させる条件(翻訳条件)と、その語彙が使われるコミュニケーション的な状況を提示し学習させる条件(コミュニケーション条件)で、学習させた。次いで、翻訳条件とコミュニケーション条件で学習した韓国語語彙を、それぞれ同じ条件で想起する際の脳活動と、学習条件とは異なる条件で想起する際の脳活動を fMRI で測定した。本発表では、社会認知神経科学的観点から実験結果を議論し、外国語学習における社会認知が果たす役割の重要性を議論する。

瀬野由衣 (名古屋大・教育発達科学)

『幼児における心の表象性理解の発達 -3歳児の特徴に着目して-』

心の表象性理解の萌芽をみるうえで、「見ること-知ること」の関係理解に着目することには意味があり、これまでに多くの知見が積み上げられてきた。3~6歳児に自他の心的状態について尋ねた筆者の研究においても、先行研究と同様に正しい心的状態への言及が4~5歳頃から可能になることが示された。それと同時に、新たに3歳代の子どもでは、自分が知識を有すると、それを行為として外在化する傾向が強いことが明らかとなった(瀬野・加藤、2007)。3歳代の子どもにみられるこの傾向は、コミュニケーション的なゲーム場面でも確認されている(瀬野、2008)。当日の発表では、3歳児にみられるこれらの特徴を紹介し、実行機能の発達との関連、また、自他に開かれた状態として知識が共有されることの発達の意味という観点から考察する。

菊池由葵子(東京大・総合文化)・千住淳(ロンドン大)・明地洋典(東京大・総合文化)・東條吉邦(茨城大)・長内博雄(武蔵野東教育センター)・長谷川寿一(東京大・総合文化)
『自閉症児・定型発達児における顔・モノからの注意の解放』

自閉症児・定型発達児における顔・モノからの注意の解放顔は注意をひきつけるだけでなく、注意を保持する。対人コミュニケーションに困難を抱える自閉症児は、定型発達児のように顔に特異的な注意を向けないことが明らかになっているが、顔からの注意の解放についてはまだ検討されていない。そこで、gap/overlap 課題中の眼球運動 (EOG) を計測し、自閉症児・定型発達児における、顔からの注意の解放とモノからの注意の解放を比較検討した。また、顔とくに目の部分へ注意を強めたとき、自閉症児のパフォーマンスに影響はあるのか検討した。

菊池 哲平(熊本大・教育)
『自閉症児(者)における表情理解-対人関係性の視点から』

自閉症児(者)が表情理解など他者の情動の理解に困難を示すことは従来から多く指摘されてきた。ここでは自閉症における表情理解を自己—他者という対人関係性の視点から検討した一連の実験結果を紹介する。その結果、定型発達児と異なり、自閉症児は自己—他者の対人関係性によって表情理解のパフォーマンスが変化せず、一方で表情刺激の抽象度の違い(線画、写真)によって大きく変化することが分かった。したがって自閉症児は表情刺激を無人称な記号として捉えていることが示唆された。当日は一連の実験結果を踏まえながら、自閉症における特徴のみならず定型発達における対人関係性を踏まえた情動理解の発達という視点からも考察を行いたい。

蓬田幸人（東北大・加齢医研）

『現実認知の神経基盤～多様式感覚にまたがる予測と感覚入力の整合性判断に関わる脳神経ネットワーク』

我々が現実世界を認識する際、外界の対象の認識および自己の身体・運動の認識が重要な役割を担っていると考えられる。様々な感覚様式の感覚入力を統合し、外界の対象を認識する過程（Multisensory Integration、MSI）、および、自己の身体・運動が自己のものであるという Agency と呼ばれる感覚が生じる過程には、共通して脳が長期記憶・運動企図から生み出す多様式感覚にまたがる予測と、実際の感覚入力との整合性を判断するという処理が含まれる。本実験では、機能的MRIによる脳機能イメージングの手法を用い、この「多様式感覚にまたがる予測と実際の感覚入力の整合性を判断する」という過程の脳神経基盤を明らかにする事を目指した。結果、MSI と Agency のエラーに共通して反応する脳領域としては、両側下前頭回、両側島皮質前部、左中側頭回、左下頭頂小葉、右前補足運動野、右前部帯状回に有意な活動がみられた。これらの領域は現実世界の認識に重要な役割を果たしていると予想される。

山田祐樹（九州大、学振）

『時空間表象の形成における情動的・社会的情報の役割』

視覚システムは、時系列的に入力される環境情報を、取捨選択を繰り返しながら、時空間的なまとまりを持つ単一の表象として統合していると考えられる。本研究は、この時空間表象の形成過程において情動的ならびに社会的情報が及ぼす影響を検討した。一つめに、標的刺激の近傍に情動を喚起する刺激を呈示し、標的の知覚される呈示時間の長さを調べたところ、不快な情動刺激を呈示した際に有意な時間知覚の伸長が生じること、そしてこれが情動刺激を無意識的に呈示した場合にしか生じないことを明らかにした。二つめに、仮現運動刺激とともに視線が動的に移動する刺激を呈示すると、その視線が仮現運動刺激を見ている場合にだけ、知覚される運動方向が変調されることを明らかにした。これらの結果から、情動的・社会的情報による時空間表象の変調と、注意および意識との関係性について議論する。

佐藤弥（京都大）

『表情の優先的知覚』

情動的表情の知覚成績は中性表情より優先的であると提案されているが、結論は得られていない。この問題を検討するため、情動的（怒り・幸福）表情と中性表情の知覚成績を、視覚探索パラダイムおよび瞬間呈示パラダイムを用いて調べた。どちらのパラダイムの実験でも、情動的表情の知覚成績は、中性表情に比べて優れていることが示された。情動的表情に対して、優先的に注意を向け主観知覚する心的メカニズムがあることが示唆される。

永澤美保（麻布大・獣医）

『ヒトと犬との交流においてイヌからの注視が飼い主の尿中オキシトシンを上昇させる』

オキシトシンは動物の社会的絆の形成において非常に重要な役割を担っているが、ヒトーイヌのような異種間での社会的絆の形成との関連については明らかにされていない。本研究では、イヌからヒトへのアタッチメントを示していると考えられる“イヌからの注視”によってヒトのオキシトシンが上昇するかどうかを明らかにするために、イヌとの交流の前後の飼い主の尿中オキシトシンを測定した。その結果、“イヌからの注視”から始まる飼い主ーイヌ間のやりとりの回数と飼い主の尿中オキシトシンの増加との間に有意に高い相関が認められた。このことからイヌからの注視がアタッチメント行動として飼い主に作用していることが示唆された。

松田剛（東京大・情報）

『チンパンジーの情動画像に対する事象関連電位』

覚醒チンパンジーを対象とした一連の事象関連電位（ERP）研究の中から、特に同種他者の情動的な画像（全身像）に対するERPを検討した実験について報告する。被験者は林原類人猿研究センターのミズキ（メス、11歳）で、情動的もしくは中立的な画像を提示したときの脳波をFz、Cz、Pz、T5、T6の5カ所において測定した。画像はいずれも野生チン

パンジーのビデオ映像から抽出したもので (Kano et al., 2008)、歯をむき出しグリメイスの表情をするチンパンジーの画像 (情動画像) 3 種と、くつろいだ様子のチンパンジーの画像 (中立画像) 12 種を提示した。その結果、情動画像に対してのみ、すべての測定部位で刺激提示後約 260ms をピークとする大きな陰性波形が観測された。同様の波形は我々が先に行った情動反応を喚起するオブジェクト画像に対する ERP 実験でも観測されており、チンパンジーの情動処理に関する ERP 成分として有力なものと考えられる。

高橋英之・岡田浩之・大森隆司・神尾陽子 (玉川大・脳科学研、神経研)

『コミュニケーションで生じるストレスを抑制するための二つの認知的基盤の仮説
-自閉症、ロボット、マルチエージェントによるアプローチ-』

コミュニケーションを円滑に成立させるためには、意図を相手に正確に伝達するという側面とは別に、双方がコミュニケーションによって過剰なストレスを受けないことが重要となる。コミュニケーションで生じるストレスを抑制するためのメカニズムとして、我々は (i) 対象の性質に応じた認知処理のトップダウンの調整、(ii) あいまいな意図伝達を用いることにより、相手に楽観的にこちらの意図の解釈させること、の二つの要素が重要であるという仮説を立てている。本発表ではこの仮説の詳細を述べるとともに、仮説の検証のために行っている以下の三つの実験を紹介させていただく。(1) 対戦ゲームで相手が人間・コンピュータという偽の教示 (実際には常にコンピュータ) が被験者の意思決定を大きく変化することを行動実験で示した。またコミュニケーションに問題があるアスペルガー障害 (高機能自閉症) ではこのような変化が生じにくいことを示した (仮説(i)に対応)。(2) 顔表情を持ったロボットとのコミュニケーションゲームにおいて、ロボットの顔表情をあえて曖昧にすることで被験者の期待文脈から逸脱したロボットの行動に対して被験者が否定的な反応を取りにくくなることを行動実験によって示した (仮説(ii)に対応)。(3) マルチエージェント社会において、個々のエージェントがある程度あいまいな意図伝達を用いることで社会全体の利得が増えること、その際に各エージェントがある程度寛大であることが必要なことをシミュレーションで示した (仮説(ii)に対応)。以上の実験結果を踏まえて仮説の妥当性について議論する。

澤田玲子(京都大・霊長研)・土居裕和(長崎大・医歯薬総合研)・正高信男(京都大・霊長研)
『手書き文字観察時における自己情報の処理-事象関連電位計測による検討』

近年、自己認識を支える神経的基盤を明らかにするための試みが精力的に行われており、顔画像や身体部位、さらには声のような身体運動の産物といった身体に関連した自己情報が右半球優位で処理されていることが報告されている。そこで、身体運動の産物である手書き文字を観察時に脳波を計測し、記録された ERP(event-related potential;事象関連電位)によって、自己/他者の情報がどのように処理されるかを検討した。その結果、刺激呈示後約 200 ミリ秒という早期段階に自己の文字を観察時に他者の文字とは異なる脳活動が右半球でのみ記録された。よって、先行研究と同様に手書き文字における自己知覚に関わる脳機能が右半球に局在していることが示唆された。本発表では、この研究について報告し、身体運動経験と自己認知の関連性についても議論したい。

友永雅己(京都大・霊長研)・伊村知子(学振、京都大・霊長研)
『チンパンジーの視覚認知における社会的刺激の影響—視線の影響を中心に—』

ヒトのみならず、チンパンジーを含むヒト以外の霊長類においても他個体の視線は社会的認知にとって重要に役割をはたしている。では、このような社会的刺激への「チューニング」が他の視覚認知に影響を及ぼすということがあるだろうか。ヒトではさまざまな実験でこのようなことが起こることが報告されているが、チンパンジーなどを対象とした比較認知科学的な観点から行われた研究は非常に少ない。そこで本発表では、視線認知を軸として、チンパンジーで行われた 3 つの実験を紹介する。1) 運動方向判断における前進運動バイアスが顔や体の向きを軸に生起する。2) 手に持った物体に注意を向けていない人物の方が注意を向けている人物よりも見つけやすい。3) お互いに向きあった顔の距離は過小評価される(かもしれない)。

田村亮（埼玉学園大）

『正直なシグナル』としての「微笑み」』

「微笑み」は他者への好意を示す表情として、人のコミュニケーションにおいて用いられている。しかしながら、なぜこの目尻を下げ口角を上げるという動きを伴う表情が、他者への好意の伝達という機能をもつのかという適応論的な議論は、現在まで行われていない。本研究では、他者へ微笑みを示す際に身体的能力が低下する可能性を検討する。すなわち、あえて自らを弱い立場へ置くことで、他者の警戒心を和らげるという仮説である。実験の結果、微笑みを表出している最中の握力が、無表情の場合と比較して低下することが明らかになった。
